

## 種痘医 大野松齋の事績

鈴木 達彦<sup>1,2)</sup>, 荻原 通弘<sup>3)</sup><sup>1)</sup>東京理科大学, <sup>2)</sup>北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究室, <sup>3)</sup>東京都

大野松齋は明治初頭の東京下の種痘事業において、多大な貢献をなした種痘医である。しかしながら、著作がないこともあり松齋の功績は今日に十分には伝わってはいない。松齋の墓には宮亀年の刻による墓碑文があり、そこには貴賤を問わず生涯で23万余人に種痘を施したとある。著作のない松齋ではあるが、明治18年医事新聞194号に坪井信良が松齋の晩年の自伝と思われる「大野松齋自伝小傳」を引用している。また、日本医事新報「近代名医一夕話」が伝えるところには、松齋の没後、その偉業が忘れられているのを憂い、昭和12年1月25日に座談会が催された。出席者は松齋の孫の大野徳子、森田半右衛門をはじめ、大滝潤家、藤波剛一、山崎佐、城井尚義、葛西勝彌、矢追秀武、梅沢彦太郎といった錚々たる顔ぶれであり、加えて、石黒忠恵らが誌上にて参加している。

以上の資料を中心にして大野松齋の事績を述べる。松齋は文政2(1819)年4月17日に秋田に生まれる。父は越前出身の大野與右衛門であり、4歳で母を失った後は叔父の莊司に育てられる。19歳のとき佐竹侯侍医の齊藤養達にはじめて医学を受ける。21歳のとき京都において新宮涼庭に就き、26才で江戸にて坪井信道の門に入り3年間学ぶ。1年間秋田に戻った後、浅草三間町で開業する。長崎でモーニッケに牛痘種痘を習ったとあるが墓碑や小伝には記されておらず、真偽は定かではない。嘉永2(1849)年ごろ伊東玄朴に種を請い、種痘をはじめ。松齋が種痘事業に並々ならぬ貢献をはじめるのは、幕末から維新への移行期である。慶応4(1868)年、松本良順は幕府の種痘苗が折からの状況によって失われるのを危惧し、大野松齋とその養子恒徳に託した。恒徳は埼玉草加近郊で苗をつないだという。同年、旧種痘所は下谷新シ橋に移され種痘館と改称され、松齋は種痘館世話役(頭取)となる。松齋父子の奔走により維新直後もすみやかに種痘を再開できた。明治2年、種痘館出張所が開設され、松齋の自宅も出張所になる。種痘館は明治5年に廃止され種痘医が免許制となり、医師宅が出張所となるが、松齋はこれの先駆けとなった。明治4年、政府はドイツに種痘医の派遣を要請したが、普仏戦争の最中であったため要請はかなわず、ドイツ大使館よりケンブルマンの種痘書を石黒忠恵が入手する。この書により、種痘苗のグリセリン希釈法についての知識を得た。この方法の希釈倍率の設定や有効性を試験したのが松齋であり、明治7年の文部省布達第27号の種痘心得に反映されていると見られる。松齋は種痘苗の確保にも寄与しており、馬喰町の牛痘種継所の医員になり、また、根岸にある自身の別荘にも牛舎を構え、痘苗を生産した。この牛舎の牛は松本良順のはからいがあり軍から提供であったという。

公的な施設である種痘所から医師の自宅の出張所へと種痘事業の体制に変化がもたらされた中、松齋が中心となって種痘医の組織である種痘積善社が設立される。積善社の取締は大野松齋、渡辺春貞、奥山玄仲、大野恒徳であり、後に種痘医四大家と称されるようになる。議員には石黒忠恵、長谷川泰、足立寛らが名を連ねる。積善社の構成員は明治11年の天然痘流行時には大いに活躍し、23,919名に種痘を施した。

松齋の根付には「必救千児」と彫られていたという。松齋は皇族、華族に痘苗を献上、接種する一方で、自ら街中に出向いて懐中に忍ばせたサツマイモや菓子をちらつかせて貧しい子供たちを自宅に迎え入れて種痘をするといったように、まさに貴賤を問わず種痘の普及に努めた。

胃癌を患い、明治21年7月17日根岸の別荘にて没する。主治医の佐藤佐や池田謙齋が最後まで診たという。数々の偉業をなした松齋、恒徳の墓は現在も谷中霊園にあるが存続が危ぶまれる。